体験談⑪

『戦争の思い出』

河村　田鶴子（かわむら　たずこ）80歳

1941年、私は、岐阜県の田舎に生まれました。家の裏の水屋と呼ばれる所に、横長で奥深い防空壕が作られ、その中には、茶碗や皿、薬鑵（やかん）等炊事道具一式も入れてありました。家の中の欄間には、夜になって家の中の明かりが外に漏れない様に暗幕がはられ、電燈には黒い布が被せてありました。空襲警報の合図のサイレンが鳴ると急いで電燈を消し家族全員が一ヵ所に集まり息を止めて、B-29が家の真上を通過して行くのを待ったり、防空頭巾を被り防空壕に逃げたりの繰り返しでした。

ある日、昼間防空壕に逃げていた時、「ゴー」とものすごい音をたて、何機ものB-29が防空壕の真上を通過しきった時、当時4才であった私は、B-29を見たさに、白い下着のまま外に飛び出し「あっB-29や。」大声で呼んだ瞬間、祖母に「上から姿が見えて爆弾を落されたらどうするの。」と強く叱られました。防空壕の中では、赤ん坊の弟が「オギャア」「オギャア」と泣き出し、声を出させまいと必死に母乳を与えていた母の姿が、今でも鮮明に残っています。

家には、名古屋から親戚の女の子が疎開してきておりました。その名古屋に焼夷弾が落ち、家族は無事でしたが、家は丸焼けになりました。その日の名古屋方面の東の空はまっ赤に染まり、子どもの私達は稲架竹（はさだけ*）に登りまっ赤に染まった空を見ていましたが、どんどん赤い炎が迫って来る様で、とても怖かった事を覚えています。又、登園の途中で警報の知らせのサイレンが鳴れば、近くの麦畑に逃げ、B-29が通過して行くまで、背を低くして隠れていた事は何回もありました。

又近所で、出征される兵隊さんが見えた時は、皆、神社に集まり軍歌を歌いながら、日の丸の旗をふりお見送りしました。

この頃の食生活は貧しく、米、砂糖、塩をはじめ、すべて配給制でした。鯨の肉の配給もありました。生きて行くのに必死で泥棒も増え、家ではかめの中に貯蔵されていた砂糖をそのままかめごと盗まれたり、月夜の晩に、リヤカーも盗まれました。衛生面も悪く、小学校に入学したら、全員にシラミ退治のDDT*を頭に散布され、白い頭で家に帰った事もありました。

女の子の遊びの中に、まりつきがありました。その中に「日本勝った」「日本勝った」「ロシア負けた」「ロシアでも降参すれば良いじゃないか」。これらを歌いながら、まりをつくのです。お姉さん達から教わりましたが、誰が考えたのかは解りません。

終戦の日の8月15日は、家族全員がラジオの前に正座して、天皇陛下のお言葉も聞きました。

当時大活躍してくれました防空壕も、今では入り口が塞がれ何事も無かったように、金柑、無花果（いちじく）が植えられ、間からはつくし、せり、蕗が生え、のんびりした風景に変わっています。

防空壕で「オギャア」「オギャア」と泣いていた赤ん坊も76才になり、医者として今では、コロナ患者さんのお役に立っているのではと思っています。

田舎に住んでいましたので、大空襲にも合わず被害も少なくてすみました私達ですが、戦争で大切なご家族を亡くされた方々には、大変お気の毒に思います。

＊注：稲架竹とは、稲刈り後に稲を干すための台

＊注 ： DDTとは、戦後、腸チフス（シラミが媒介）の撲滅のため、身体にかけていた殺虫剤・農薬。